

詩篇 79 篇

0 アサフの賛歌

《敵による蹂躪》

- 1 神よ。国々は、ご自身のものである地に侵入し、あなたの聖なる宮をけがし、エルサレムを廃墟としました。
- 2 彼らは、あなたのしもべたちのしかばねを空の鳥のえじきとし、あなたの聖徒たちの肉を野の獣に与え、
- 3 聖徒たちの血を、エルサレムの回りに、水のように注ぎ出しました。彼らを葬る者もいません。
- 4 私たちは隣人のそしりとなり、回りの者のあざけりとなり、笑いぐさとなりました。

《救いの嘆願》

- 5 主よ。いつまででしょうか。あなたは、いつまでもお怒りなのでしょうか。いつまで、あなたのねたみは火のように燃えるのでしょうか。
- 6 どうか、あなたを知らない国々に、御名を呼び求めない王国の上に、あなたの激しい憤りを注ぎ出してください。
- 7 彼らはヤコブを食い尽くし、その住む所を荒らしたからです。

《先祖の咎の想起》

- 8 先祖たちの咎を、私たちのものとして、思い出さないでください。あなたのあわれみが、すみやかに、私たちを迎えますように。私たちは、ひどくおとしめられていますから。
- 9 私たちの救いの神よ。御名の栄光のために、私たちを助けてください。御名のために、私たちを救い出し、私たちの罪をお赦してください。
- 10 なぜ、国々は、「彼らの神はどこにいるのか」と言うのでしょうか。あなたのしもべたちの、流された血の復讐が、私たちの目の前で、国々に思い知らされますように。

《とこしえの賛美》

- 11 捕らわれ人のうめきが御前に届きますように。あなたの偉大な力によって、死に定められた人々を生きながらえさせてください。
- 12 主よ。あなたをそした、そのそしりの七倍を、私たちの隣人らの胸に返してください。
- 13 そうすれば、あなたの民、あなたの牧場の羊である私たちは、とこしえまでも、あなたに感謝し、代々限りなくあなたの誉れを語り告げましょう。

本篇は、74 篇と多くの共通性をもつ詩篇です。74 篇では、紀元前 587 年に起きたバビロニア帝国のエルサレム侵入と神殿破壊が背景にあったと思われます。79 篇もおそらく背景は同じであり、詩人はどうにか生き延びて他国へ逃げた少数民の一人だったのでしょう。

祖国が跡形もなく破壊されていく様子を絶望の面持ちで眺めていたのだと思われます。

1～4節では、神殿を含むエルサレムの町全体が壊されていく状況を描いています。ヤハウェなる神を知らぬ者たちが聖なる神殿を踏みにじり、多くの民を虐殺しました(2節)。死者の数があまりにも多かったため、葬ることもできず野ざらしにされた死体が多く転がっていたのでしょう。葬られずに遺棄されることはイスラエル人にとって大変な屈辱でした。「血を…水のように注ぎ出し」(3節)とは、命が何とも思われず、動物のごとくに人間が殺されていく惨劇を描いています。そして、イスラエルに敵する周辺諸国は「ざまあみろ」と笑っていたというのです(4節)。

5～7節を読むと、この詩人が今般の大帝国の侵入を「神の審き」と受け留めていることが分かります。「あなたは、いつまでもお怒りなのでしょうか。いつまで、あなたのねたみは火のように燃えるのでしょうか」(5節)と、偶像を拝み続けた民に対して、神が如何に悲しみ、怒ってこられたかを認めています。人は愛が深ければ深いほど、裏切られた悲しみは比例して大きくなるでしょう。神がどんなにイスラエルを愛しておられたか、ご自分だけを愛してほしかったかを痛感させる言葉です。そして、詩人は尚も自分を「神の民」とし、愛されるべき対象として、自分たちの側に立ってくださるよう懇願します。自分たちに向けられている怒りを、迫害者に向け直してくださいと(6節)。

8～10節で特に目につくのは「先祖たちの咎」(8節)という表現です。詩人はイスラエルの歴史をよく知っていました。神がこの民を特別に選び分け、ご自分のものとされたこと。多くの危機から贖い出されたこと。そして、そんなにも愛してくださっている神を民は棄て、異国の神々を拝み続けてきたこと。その不従順の歴史の結果が、今こうしてバビロン捕囚という形で現れていると認識しているのです。詩人にとって、先祖と自分とは一体でした。私たちの中にはそういう民族的アイデンティティが存在するのでしょうか。一例として、ある国家がある国家に対して罪を犯した場合、国家単位での遺恨が尾を引くことがあります。後代の人々は、自分は何もしていないのに、相手の国に行ったら石を投げつけられたということが起こるかもしれません。詩人は、イスラエル民族の一員として、自分は神に対して罪ある存在であることを知っていました。だから、「私たちの罪をお赦ください」(9節)と祈るのです。

更に、赦しとともに救いを求めます。救いの目的は、ただ自分たちが苦しみから解放されることばかりを求めるものではありません。詩人の最大の関心事は、「御名の栄光のため」「御名のため」(9節)でした。「神様、もしイスラエルが無抵抗のまま壊滅するならば、その国に神がおられないと周辺諸国に認識されることとなりますよ。だから動いてください」と。

本篇も最終的には、やはり賛美へと向かっていきます。11～13節では、バビロンに連れ

去られた人々が生き残ることができるようにと祈り（11節）、神の御手による復讐が願われています（12節）。その復讐の目的は、異邦の民がヤハウエの御名をそしったことへの報いであって、民の罪が忘れられることではありません（12節）。そして、永遠の賛美でもって締めくくられます（13節）。「代々限りなく」という表現は、8節の「先祖たちの咎」に対応しているでしょう。つまり、先祖たちがもたらした災いを祝福に変えてくださるよう祈っているのです。ここで思い起こす聖句があります。

わたしを憎む者には、父の咎を子に報い、三代、四代にまで及ぼし、わたしを愛し、わたしの命令を守る者には、恵みを千代にまで施すからである（申命5:9-10）

確かに先祖の咎は三代、四代にまで災いをもたらし、詩人の時代にまでも及びました。しかし、その罪が償われたとき、神は恵みを千代（永遠）にまでももたらされるのです。究極的には、罪からの贖いはキリストの十字架によって全うされることとなります。

私たちの人生も紆余曲折があり、時には自らの身に災いを招くような罪を犯してしまうこともあるでしょう。しかし、私たちのすべての罪は主イエスの十字架の血潮によって洗い清めていただきました。そして、この恵みに立っているならば、罪の赦しと神との契約関係は、永遠に変わることはないものとして、私たちの内にあり続けるのです。